

令和 8 年度第 1 回三重県教育改革推進会議
議事概要

- 1 日 時 令和 8 年 5 月 20 日（水）10 時 00 分から 12 時 00 分まで
- 2 場 所 三重県総合教育センター 多目的ホール
- 3 出席者

三重県教育改革推進会議委員 12 名

小 林 慶太郎	会 長	松 浦 直 己	副会長
浅 井 美 代	委 員	伊 藤 文 子	委 員
江 森 真矢子	委 員	貝ノ瀬 滋	委 員
川 北 睦 子	委 員	川 瀬 雅 生	委 員
黒 田 喜 昭	委 員	田 中 望	委 員
廣 瀬 琢 也	委 員	耳 塚 寛 明	委 員

（事務局）

長崎教育長、大屋副教育長、

坂井次長兼総括市町教育支援・人事監、尾上次長、荒川次長、小濱次長、

奥山教育政策課長、水谷高校教育課長 ほか

4 配付資料

- 資料 1 三重県教育改革推進会議条例
- 資料 2 三重県教育改革推進会議 委員名簿
- 資料 3 令和 8 年度三重県教育改革推進会議の進め方
- 資料 4 次期県立高等学校活性化計画の策定に向けた基本的な考え方
- 資料 4（別冊） 三重県の地域区分及び高等学校所在地
- 資料 5 次期県立高等学校活性化計画 骨子（案）

参考資料

県立高等学校活性化計画

答申

高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）

三重県教育ビジョン

5 会長及び副会長の選出

三重県教育改革推進会議条例第 5 条第 2 項の規定に基づき、委員の互選により、会長に小林委員、副会長に松浦委員が選出された。

6 令和8年度三重県教育改革推進会議の進め方

奥山教育政策課長から資料3（令和8年度三重県教育改革推進会議の進め方）に基づいて説明。委員からの意見は特になし。

7 審議事項（次期県立高等学校活性化計画の策定について）

奥山教育政策課長から資料4（次期県立高等学校活性化計画の策定に向けた基本的な考え方）、資料4（別冊）（三重県の地域区分及び高等学校所在地）、資料5（次期県立高等学校活性化計画 骨子（案））について説明。説明内容に関する質疑への対応の後、次期県立高等学校活性化計画 骨子（案）に関し、「2 現状・課題」、「3 県立高等学校活性化の基本的な考え方」、「4 県立高等学校活性化の取組」を中心に委員間で議論が行われた。

説明内容に関する質疑は次のとおり。

（耳塚委員）

- A I に代替されない力を育むための具体的な取組として、現時点でどのようなものを検討しているのか。また、グランドデザインが示す改革先導拠点に関する3つの類型の中で、現時点で実行に移す計画はあるのか。
 - 事務局（水谷高校教育課長）：3類型ごとに先導拠点校を選定し、5月15日に国へ申請したところ。採否の決定は6月下旬と聞いている。
 - 事務局（尾上次長）：地域で活躍する人材を育成する類型1では、工業や農業といった専門学科を有する拠点校を検討している。理系人材を育成する類型2では、文理双方の素養を身に付けられる教育を提供する拠点校を検討している。多様な教育機会を確保する類型3では、開設できる科目が限られる小規模の高校に遠隔で授業を配信する拠点校を検討している。
 - 事務局（大屋副教育長）：A I に代替されない力を育むための取組に関し、現状はA I を活用した授業に取り組み始めた段階である。今後どのような力が必要で、どのように取り組んでいくかについては、次期学習指導要領に向けた国の動きも見据えて検討していきたい。

(廣瀬委員)

- 次期計画についての議論を進めるに当たっては、現行計画に基づく取組、特に「(6)これからの時代に必要な力を育む県立高等学校の各学科・課程の活性化」についての評価を行い、当会議にその結果を示していただく必要があると考える。

→ 事務局（大屋副教育長）：現行計画に基づく取組について、その多くは三重県教育ビジョンにも記載されている取組である。「(6)これからの時代に必要な力を育む県立高等学校の各学科・課程の活性化」の評価結果については、次回以降の会議で別途示せるよう検討したい。

(黒田委員)

- グランドデザインで示された 2040 年までの達成を目指す目標のうち、専門高校の生徒数を現在と同水準とすることについて、全国と比較して専門学科の割合が高い三重県も同じように考えるのか。

→ 事務局（大屋副教育長）：生徒の学びを一律に方向付けるのではなく、生徒の希望を最優先にしたいと考える。その上で、将来必要な力を育むことができる環境を整えられるよう、慎重に検討していく。

(川北委員)

- 次期計画は、高校教育改革実行計画に位置付けるのか。

→ 事務局（大屋副教育長）：高校教育改革実行計画についても令和 8 年度中に策定する必要がある。類似する計画を別々に策定することは避けたいと考えるが、どのように位置付けるかについては現在検討中である。

次期県立高等学校活性化計画 骨子（案）に関する主な意見は次のとおり。

(貝ノ瀬委員)

- 次期計画について、高校改革の必要性を明示することで、適正規模や統廃合の必然性が伝わりやすいものになると考える。
- 今後、具体的な学校の取組を検討するに当たっては、他都道府県の取組も参考にしたい。

(川北委員)

- 骨子(案)は、グランドデザインの基本的な考え方が反映されておらず、危機感が伝わってこない。
- グランドデザインに示された3つの視点に合わせた取組を記載し、県の人材を育成する戦略としての意味合いを持たせてはどうか。

(江森委員)

- グランドデザインに無理に合わせる必要はないと考える。三重県の特徴を踏まえた現状・課題とその対応について、熟考してほしい。
- 骨子(案)の構成について、現状・課題とその対応が中心であり、目指す未来像のようなものが描けていないと感じるため、生徒が希望を持てるイメージを盛り込んでほしい。

(伊藤委員)

- 三重県では、早くから総合学科を設置するなど多様な学びを提供しているため、学科の割合については、現時点であまり意識しなくてもよいのではないか。
- 地域・企業との連携・協働に関する記述をもう少し強調してほしい。

(浅井委員)

- 三重県は縦に長く、地域差が大きいため、一律に再編することは適さないと考える。次期計画では、各地域の実情や、三重県ならではの特徴を盛り込むとよいのではないか。

(松浦副会長)

- 次期計画では「学びの多様化」がキーワードとなる。教職員が生徒の才能を発掘し、その才能を伸長できるよう、高校において学びの多様化を進めることが重要である。

(川瀬委員)

- AIが想像を超えるスピードで進化する社会において、自ら問いを立てて課題設定する力や、AIの出した答えを検証する力が大事になる。生徒にこうした力を育むためには、AIを正しく理解し、生徒に適切に指導できる教職員の育成が必要であると考えます。

(廣瀬委員)

- 三重県教育ビジョンの計画期間が令和9年度までであることから、骨子(案)の「3 県立高等学校活性化の基本的な考え方」において、三重

県教育ビジョンに記載されている文言を使用することは適切ではないと考える。

→ 事務局（大屋副教育長）：子どもたちに育みたい力である「自立」「共生」「創造」は、これまでの国の教育振興基本計画や三重県教育ビジョンから脈々と受け継がれてきた大切な軸であるため、次期ビジョンにも継承したいと考えている。

- 県立高等学校の活性化の取組について、三重県教育ビジョンの取組に合わせるのではなく、課程・学科の目指す姿や先導拠点校の取組など、活性化の肝となるものを記載してはどうか。

（貝ノ瀬委員）

- 「自立」「共生」「創造」は普遍的なテーマである。教育には変えてはならない部分がある一方で、A I への対応など、新たな課題への対応も必要になる。
- 非認知能力を育むことも重要である。
- コミュニティ・スクールの仕組みを活用し、地域の課題解決に取り組むことが大事である。

（川北委員）

- 先導拠点校だけでなく全ての高校でA I を活用できる人材の育成に取り組むべきである。

（松浦副会長）

- 小中学校全体で40万人弱いる不登校の児童生徒が、これから高校に入学することになるため、定時制課程や通信制課程こそ学びの多様化を推進することが必要である。また、こうした取組を三重県が全国に先駆けて示すことが重要である。
- 高校を中退した者に対しても、学び直しの機会を提供する体制が必要ではないか。

（廣瀬委員）

- 私立高校の授業料が実質無償化されたことにより、県立高校に少なからず影響が生じているため、普通科の高校の活性化が大きな課題である。
- 職業系専門学科を有する高校の学びを充実させることや、四日市工業高校の専攻科を高等専門学校とすることなども検討すべきである。子どもたちが高校に対して期待を持てるような夢のある計画を望む。

(江森委員)

- これからの高校の活性化に向けては、新たな取組を積み重ねるだけでなく、削るべきものは削るなど、現場の教職員が疲弊しないよう配慮することが重要である。

(黒田委員)

- 教職員の資質・能力の向上に向けた取組と教職員の負担軽減のバランスが課題である。
- 過去に進路指導を経験した中で、私立高校を選択した理由に学校施設を挙げている生徒がいた。校舎の老朽化の状況も踏まえ、統廃合の際は既存の校舎をそのまま活用するのではなく、新たな校舎を建てることを検討してもらいたい。

(田中委員)

- 私立高校を選択した生徒の保護者の中には、その理由に授業料の無償化のほか、学校施設やクラブ活動も挙げている。

(小林会長)

- 生徒がA Iを活用できるようになることの前提として、教職員がA Iを活用できることが重要である。また、A Iを活用することは教職員の負担軽減にもつながる。
- グランドデザインは、生徒を労働市場における人材として捉えているという印象を受けるが、幅広い教養を身に付けるなど、人格形成の視点も重要である。
- 国が求める理系人材を育成するためには、生徒が理数やA I・D Xを「好き」「楽しい」と思える環境づくりから始めることが大切である。
- 県立高校が一度社会に出た者の学び直しの中での役割も担うことで、一層の活性化につながるのではないか。

(了)